

ESD レポート

Education for Sustainable Development

vol. 17

2008 冬

2008年12月22日発行

NPO 法人「持続可能な開発のための教育の10年」推進会議

ESDとは「持続可能な開発のための教育=Education for Sustainable Development」の略。社会、環境、経済、文化の視点から、人類が直面するさまざまな課題に取り組み、公正で豊かな未来をつくる「持続可能な開発」——それを実現する力を、世界各地に生きる私たち一人ひとりが学び育むことをめざして、「国連持続可能な開発のための教育の10年(ESDの10年)」が、2005年からスタートしています。



シリーズ
学びの場をデザインする

民衆知・伝統知を活かした教育改革

先住民の中ではじまっている「地域に根ざした教育」

高野孝子

子どもたちの教育は学校で、と私たちは思いがちだ。けれど「教育」は家庭でも地域でも、意識しているかどうかに関わらず日常生活のあらゆる場面でに行われている。そもそも国民全体のための学校という制度ができてから、日本ではまだ140年にもならない。

学校という機関は現在多くの国で、しくみも内容もレベルも、欧米をスタンダードとしてつくられている。アイデンティティの形成や、個々人の成長、地域の発展という視点から、ある場所固有の文化や知識を伝達する「地域に根ざした教育」に注目が集まっている。

キーワード

地域に根ざした教育
place-based education
先住民族の知恵、技術、文化

自分たちでワナを仕掛けてつかまえたビーバーの解体方法を学ぶユピック族の子どもたち



グローバル経済が 先住民の暮らしも変えていく

アメリカのアラスカ州ユーコン川沿いのロシアンミッション村は、人口300名ほど。ほとんどがユピック民族というアラスカ先住民だ。周囲は川以外に、池、湖、丘やツンドラで、ヘラジカやクマ、ハリネズミ、オオカミ、クズリ、さまざまな水鳥や魚が暮らす。グローバル化で社会が大きく変わった今でも、村ではこうした野生生物が食料として重要だ。これらを食べることが彼らの文化であることと、村では現金収入を得る仕事が極めて限られており、遠方から店に運ばれてくる高額な食材を購入し続けることはできないからだ。

しかし現実には複雑だ。現代では狩りに行くにも金が必要だ。ボートやスノーマシンはもちろん、燃料や銃、弾薬も購入しなくてはならない。多くの人たちがこれまでのようには外に出なくなった。伴って子どもたちも大地との関わりが薄くなった。

西欧的教育が招く、 先住民のアイデンティティ喪失

アラスカでは、アラスカ大学の研究者を中心とする the Alaska Rural Systemic Initiative という団体が、place-based education（地域に根ざした教育・PBE）という考え方を推し進めてきた。西欧の学問や考え方を基礎とする学校教育の中に、その土地の先住民たちの知恵の居場所を作りだそうという教育改革だ。背景には、特にここ60年ほどアラスカ先住民たちは、「学校」を持ち込んだ白人のアメリカ人たちによって教化され、英語を強制され、文化も生きかたも変えてきたことがある。学校教育は、そこで紡がれてきた知恵や技術を否定しつつ、いかに「西欧の知識」を先住民の子どもたちに教え込むかが焦点だった。

こうした「同化政策」が、アイデンティティや希望の喪失につながり、現在の自殺やアルコール中毒などの社会的な課題につながっているとされる。先住民の生徒たちは、概して中退率が高く試験結果も悪いため、「問題」であり「頭が悪い」と見なされてきた。ロシアンミッションの子どもたちも例外ではなかった。

伝統的な狩猟採集を素材として 教科をつなぐ

私が最初に村に入った2002年には、ロシアンミッション学校には1年生から12年生まで106人の生徒がいた。一人を除いて全員がユピック族だった。学校は2001年から、カリキュラムを大きく変更した。「大地との絆を築く」ねらいのもとに、昔から村のライフスタイルであった狩猟採集を中核に据え、それを素材として、6年から12年生の理科や算数、英語など、あらゆる教科に組み込まれた。

生徒たちは野外での活動前にはインターネットや本などで調査をし、学習成果をまとめる。活動中はデジタルカメラで記録し、校舎に戻ると、文書作成やコンピューター技術、編集などのセッションが実施された。活動はそれぞれの教科に応じた学習目標を達成するように計画され、狩猟採集を中心としたプログラムは、学習のためのフレームワークを提供した。

なぜ狩猟採集を中心とする カリキュラムにしたのか

当時のハル校長は二つの大きな理由を挙げた。「ここで生きていくために必要な技術と知識を教えるため」、「自分が何者かを知りそれが認められることで自信をつける、これが人としての基礎になるから」。すでに村の子どもたちの多くは、本格的な狩猟採集の経験を持っていなかった。

生徒たちの多くは学校を出た後も村で暮らすことを選ぶ。よって狩猟採集に関するさまざまな技術の習得が直接的に役に立つ。また、ユピック族の世界観では、人間を自然や超自然界を含んだあらゆるものの中での関係性の中にゆだねる。だから大地とのつながりを取り戻すことが、彼らの自信やアイデンティティの確立につながる。とする。

このカリキュラムを導入してから、 変化が起きた

生徒らにとってはこれまではさぼりたくてしょうがなかった学校が、楽しくて行きたい場所になった。野外での活動を通して



ロシアンミッション学校の授業の一コマ。ウサギのワナのしかけ方を学ぶ

教員との関係も前向きに変わった。加えて野外での経験が「具材」と動機となり、子どもたちはさまざまな学校のタスクに積極的になった。

州共通の試験を見ると、読み・書き・算数において、生徒たちの成績がぐんぐん上がっていった。他の学校全体の平均が下がった時でも、ロシアンミッション学校だけは上昇した。結果、ロシアンミッション学校が属する学校区で、州が定める「適度な学力向上度」をクリアしている唯一の学校となった。

生徒らにインタビューをすると、「学校はとても楽しい」「自然を自分の家のように感じるようになった」など、成果を裏付ける答えが返ってきた。2002年と同じ人たちを5年後にインタビューしたが、成長したことも伴い、言葉豊かに自分と周囲の自然環境の関係について語ってくれた。

「場」に適した教育、子どもたちに適した教育の意義を見いだすことができる。

PBEはここ10年ほど全米で注目を集め、静かなムーブメントになっている。アラスカ先住民と同様の課題を抱えるニュージーランドやハワイの先住民たちの中でも、「教育を自分たちの手に取り戻そう」と、それぞれの地域に固有な文化や知識を伝える機運が高まりを見せている。

「場」を公教育の中核として位置づけるPBEは、主流の文化や価値観を補強するだけのこれまでの教育を変える可能性を持つという声がある。教育は何の、誰のためにあるのか。先住民族らの試みは、地方の衰退が懸念されている日本の将来を考える上で、参考になる点が多いと思う。



高野孝子

NPO法人 ecoplus 代表理事、早稲田大学客員准教授。新潟県在住。報道部記者を経て、教育団体を立ち上げ、「人と自然と異文化」をテーマに、体験を重視した地球規模の環境・野外教育プロジェクトを企画運営。犬ぞりとカヌーによる北極海横断やミクロネシアの孤島での活動を素材とするプログラムを展開。「地域に根ざした教育」の重要性と「農山村は学びの宝庫」を訴え、2007年より「TAPPO 南魚沼やまとくらしの学校」事業を開始。

ESDを広げ、すすめるために

このコーナーでは、ESD-Jが進める主要プロジェクトやその成果を紹介し、ESD-Jが何をめざし、何に取り組んでいるのかを紹介していきます。3回目は、地域 & 研修 PT の「ESD 自治体プロジェクト」と、研修 PT の「企業向け人材育成事業」の二つをご紹介します。

地域 & 研修プロジェクトチーム

市民と自治体職員が共に学び、地域を創造する

ESD 自治体プロジェクト

ESD-Jは、各自治体に対して、自治体職員と市民がともに学びあいながら進める「市民との協働による地域づくり」を提案しています。2008年度は、愛知県安城市の「環境首都安城プロジェクト」、沖縄県の「やんばる3村 ESD 人材育成講座」などの企画・実施に全面的に協力し、行政と市民が協働で進める ESD のあり方を探っています。

【安城市 環境首都安城プロジェクト】

安城市のめざす都市像「市民とともに育む環境首都・安城」の実現を担う「人づくり」を目的に、市民との協働による持続可能な地域づくりをテーマに実践的な学習を展開しています。



地域の課題に取り組む職員たち

今年度は、まずは部署横断的に集まった職員 36 名を対象に、5 月から 12 月までの 8 ヶ月間、地域の多様な課題をテーマに 9 回の研修に取り組みました。

安城市 ESD 職員研修の特長

●部署を横断した職員の参加●

公募で集まったさまざまな部署の職員が横断的に参加し、地域の課題の解決に取り組む。

●取り組む課題も横断的●

テーマは、環境や多文化共生、地域経済などから、市民との協働、プロジェクト企画などまで、テーマ横断的に取り組む。

●参加型の学習を継続的に●

毎回、専門家の講義とワークショップを行い、さまざまな課題を「自分事」として受け止めながら、対話型の合意形成のしかたや市民との協働によるプロジェクトの進め方自体も学ぶ。

【やんばる3村 ESD 人材育成プロジェクト】

沖縄県北部のやんばる地域3村（大宜味、東、国頭）において、ESD-J 会員である国頭ツーリズム協会と連携し、持続可能な地域の担い手育成を進めています。参加者は、行政職員、JA 職員、地元ツーリズム業者、民宿経営者、農家などさまざま。



3 村の住民が力を合わせて、地域を変える

3 村に共通する課題や資源、これまでの取組みを丁寧に扱いながら、持続可能な地域づくりに必要なコト・モノ・ワザについて学んでいます。

研修プロジェクトチーム

社会的アンテナを磨く人材育成こそが、企業の社会的責任

企業向け ESD・CSR 研修

これからの時代、社会的責任を無視した企業経営では成り立ちません。しかし、そのために重要でありながら手付かずなのが、サステナブルな価値観や問題解決型の思考法をもち、自らの事業戦略・活動を社会的な視点で見直し、実行できる「人材の育成」であると言われています。そしてなによりも、持続可能な社会を創造するためには、市民活動家ばかりでなく、もっと普通の大人の人们たちが、暮らし方、働き方を見直し、社会へ参加することが欠かせません。そのような立場から、ESD-J は、企業セクターに対する ESD の理解促進と、各社の人材育成戦略へ ESD の導入を積極的に提案しています。

企業にあった 3 つの ESD アプローチ

1) 社員と企業変革のための ESD プログラムの導入

企業の社員に対し、体験型の ESD 人材育成プログラムを実施する。

2) 社員の気づきを促すしくみづくり

すでに実施している社会貢献活動に対して、より主体的な社員の参加を促すシステムを構築する。

3) 持続可能な社会を創造する人づくりに貢献

地域の ESD 活動の多面的な支援や、持続可能な社会を創造する人づくりを社会貢献事業として直接実施する。

【CSR 研究会における ESD 実践講座開催】

今年度は、CSR のコンサルティング会社が主催する CSR の研究会において、ESD をテーマとした講義とワークショップを開催しました。当日は、当該研究会の 13 社 23 名の CSR 推進担当者が参加し、「サステナブルな視点を有する人材の育成」について、企業にとっての意義を確認したり事例を交えた実践方法を紹介し合い、その後「体験的に社会のことを学ぶ体験」として、開発教育協会が開発した「パーム油と私たちの暮らし」のロールプレイングを参加者とともに行いました。

参加した企業の CSR 担当者からは、「社会的なセンスをどう磨くかが、CSR を進める上で重要」「ESD は今行っている社会貢献活動そのものだとわかり、社内説明で ESD を活用してみようと思った」「社会的センスをみがく、本質をとらえることの一部がつかめた気がするので、ESD は業務に生かせる」などのコメントをいただきました。



ロールプレイングで、途上国の開発問題に取り組む CSR 担当者たち

★ ESD-J の実施事業に関しては、ESD-J のウェブサイト「ESD-J の活動」のコーナーで詳しく紹介しています。

ピックス ESD の推進は、あらゆる主体者の連携強化を — ESD 国際フォーラム開催 —

ESD-J だより

2008 年 10 月から 11 月の活動報告

- 10月1日 地域ワークショップ in 東京パート1
- 10月3日 地域ワークショップ in 愛媛
- 10月9日 地域ワークショップ in 東京パート2
- 10月11日 第1回 やんばる3村ESD人材育成
(持続可能な〇〇って何だろう?)
- 10月20日 プロジェクトリーダー会議
- 10月22日 安城市 ESD 職員研修 (先進地
域に学ぶ)
- 10月23日 SR フォーラム 出席
- 10月29日 第3回 ESD カフェ ~ 持続可能
な未来の描き方~
- 10月29日 ~ 11月2日 ユネスコ東アジア ESD 会議 出席
- 10月29日 環境あきた県民フォーラム環境
教育リーダー研修 講師派遣
- 10月30日 環境省環境調査研修所 環境教育
研修 講師派遣
- 10月31日 JICA 集団研修「自然体験を通した
環境教育トレーニング」講師派遣
- 10月31日 ESD レポート (16 号) 発行
- 11月1日 第2回 やんばる3村ESD人材育成
(地域の記憶と資源を見直す)
- 11月5日 筑波大学農林技術センター 2008
農学 ESD シンポジウム 講師派遣
- 11月8日 ~ 10日 AGEPP 国際会議
- 11月10日 ESD レポート 板橋区社会教育
主事インタビュー
- 11月13日 ESD 推進に関する公開質問状へ
の各党の回答公開
- 11月14日 ESD 関係機関連絡会議 出席
- 11月18日 安城市 ESD 職員研修 (市民と
の協働)
- 11月25日 ESD 実践ハンドブック編集会議
- 11月28日 第2回 ESD ヒント集 編集委員会
- 11月28日 第4回 ESD カフェ~ 沖縄やん
ばるの地域と人づくり~

12月2日(火)~5日(金)、文部科学省およびユネスコの主催による「ESD 国際フォーラム」が開催されました。この会合は、2009年にドイツのボン市で開催される「ESD 中間年評価会合」に向けた、アジア地域における準備会合として位置づけられています。約40カ国から、ユネスコ国内委員会の代表者、ユネスコ地域事務所の担当者、研究者が集い、アジア太平洋地域におけるESDの取組と共有・評価し、ESD活動の認定制度や、多様な分野・セクターの実施主体を巻き込んだコンソーシアムの構築、ESD促進のための研究のあり方について議論しました。

会合前半の各国の取組の発表では、「多様な主体の連携や、分野横断的なアプローチは大事ではあるが、実際の活動が、限られた主体による特定の活動に偏っている」という課題を多くの国が持っていることが共有されました。日本の発表は、主催・共催団体の取組が中心で、国内でもESDを進めてきたNGOやその他の主体による取組の紹介は、残念ながら十分にはありませんでした。

会合後半、フラッグシップの構築に向けたセッションの中で、阿部治代表理事が、「日本では、複数の省庁・NGO・企業がともにESD活動を実施しており、ESD-Jは、多様な主体がESD活動に関わっていけるよう働きかけを進めてきた。またESDを進めていくためには地域知や伝統知の役割が大きい」などと強調。その後のセッションでは、各国の参加者からも、「伝統知」、「NGOや企業、メディアとの連携」、「地域の価値を認めるESD研究と、研究者のコミュニケーションはどうあるべきか」など、会議前半には見られなかった新たな視点を含んだ発表や意見がたくさん出されました。

会議総括セッションで、中間年会合に向けた勧告文を公開。「企業セクター・NGOなどあらゆるステークホルダーとの連携を強化する国際的な協力のメカニズムの促進」を呼びかける一文も入りました。ESD-Jからの発言も、会議の方向性に大きな影響を与えたと思われる。会議報告および勧告文は、日本ユネスコ国内委員会のウェブサイトに掲載される予定です。



期間中、韓国ユネスコ国内委員会事務局長や、インド環境教育センター代表が、ESD-J事務局を訪問。

私たちがESD-Jに入ったわけ

「世界が教室」—— 学べる旅を創っています



インド・児童労働をテーマとしたツアーにて

らよいか、皆様との交流の中でヒントが見つければと思い、入会を決めました。また今までは海外での活動が主でしたが、今後は国内で活動されている皆様とも協力させていただき、もっと気軽に参加していただける学びの場を提供できればと考えています。

(株) 日本エコプランニングサービス

日本エコプランニングサービスは、「旅を通して社会貢献を！」を合言葉に、旅先でボランティアに参加するツアーや、さまざまな環境・福祉活動、途上国支援活動などをテーマとしたスタディツアーを専門に扱う旅行会社です。

旅に参加することで、楽しみながら社会貢献ができる、さまざまな問題を解決するための自分なりのヒントが見つかる、そんな機会を提供することで、私たちの活動そのものが「持続可能な社会」づくりに貢献できれば、という想いで旅を創っています。

数ある地域やテーマの中から、何をどのようなアプローチで伝え、体験してもらう機会を提供した

新メンバー紹介



個人会員 正会員 2 名、準会員 10 名、合計 12 名の方が新たにメンバーに加われました (関東地区 10 名、中部地区 1 名、関西地区 1 名)

特定非営利活動法人「持続可能な開発のための教育の10年」推進会議 (ESD-J)

http://www.esd-j.org/ e-mail: admin@esd-j.org

〒150-0001 東京都渋谷区神宮前5-53-67 コスモス青山B2F

TEL: 03-3797-7227 FAX: 03-6277-7554

● 会員募集中：正会員 (10,000 円)、準会員 (3,000 円) 詳しくは HP をご覧ください ●



編集会議は18時から始まりました。事務局の作ったたたき台をもとに意見を出しあいました。ゆっくり話あっているわけではありませんが、時間がかかります。みな熱心に考えているのです。終わったのが22時でした。おなかはずいずいしまいました。いつもはみんなで食べに行きますが、この日はみなそれぞれ帰りました。私は近くの店に入ってらーめんを食べました。このひとときが疲れをいやしてくれます。(情報PT小寺正明)

みなさんも、ESD レポートの編集に参加して、ESD のことを一緒に考えませんか? 希望者は事務局まで。

発行: NPO 法人「持続可能な開発のための教育の10年」推進会議 編集: ESD-J 情報共有プロジェクトチーム レイアウト: 河村 久美